

【若 楓】

楓若葉 青楓

若楓も青楓も古歌にあり、季語として独立している。木の葉は、深く裂けて葉脈に達すると葉身が複葉に分かれる。複葉の規則的な並び方で分類されている。

葉柄の延長である葉軸から左右に並ぶものが羽状複葉、軸の先端を頂小葉、左右に並ぶのが側小葉である。頂小葉があれば複葉は奇数になるから奇数羽状、なければ偶数羽状と呼ばれる。葛のように小葉が左右に一枚ずつ、先端一枚のものが三出複葉で、木の葉にはこれが多い。三枚を超えるのが掌状複葉という。

楓の代表は福島県以南のイロハモミジである。楓には落葉樹が多い。葉は掌状で、蛙の手に似ているから「カエルデ」と呼ばれ、転訛してカエデになったとされる。風媒花で実は翼果が二つ並ぶ。実が落ちるときには、回転して滞空時間を稼ぐ。複葉の数が、三、五、七枚といろいろあり、一三枚のハウチワカエデもある。

葉や実は歯や身に通じて、京言葉なら「はあ」のように二音である。頭や体は三音、このような基本的な単語を足して、五音、七音となる。俳句の一七音も短歌の三一音も、楓の実や葉の作りと同じく、素数を要素として成り立っている。素数の刻む神秘的なリズムは、紅葉を愛でる日本のところに、基本的な共鳴を起こすリズムであるのかもしれない。